

アナウンサー・金子覚関係資料①

～戦時中の録音放送原稿～

メディア研究部 島田匠子

はじめに

「放送史料 探訪」では、戦中から戦後にかけて日本放送協会のアナウンサー（当時の名称は放送員）としてラジオ放送に携わった金子覚氏が残した資料を複数回にわたって紹介する。今回は、これまでにまとまった形で収集されてこなかった戦時中の録音放送に関する原稿を中心に取り上げる。



写真1 金子覚氏（1947年、熊本中央放送局時代）

金子氏は、1941年、早稲田大学卒業と同時に日本放送協会に第11期アナウンサーとして入局。3か月の養成期間ののち熊本中央放送局に赴任し、その後、長崎放送局でも勤務した。戦後、1948年に東京中央放送局へ転勤、1960年に千葉放送局放送部長、その後、放送文化研究所や監査室を経て1974年に退職した（写真1）。

残された資料によると、戦時下では、生産増強を目指して制作された『産業回覧板』や、青年を対象に士気向上を図ろうと企画された『青年手帖』など、時局を反映した多くの番組を担当している。

資料の概要

金子氏の資料は、2018年に遺族からNHK放送文化研究所に寄贈の打診があり、受け入れを行った。総点数は73点、資料構成は大きく分けて2つ。録音放送に関する資料と、戦後、GHQの指導のもと市民の声を放送に取り入れる番組として始まった『街頭録音』の資料で、年代は1943年から1947年に集中している（表）。

表 資料の内訳

番組の種類	資料の種類	点数
録音放送関連	放送原稿	7点
	放送番組表	4点
	自作詩文集	2点
『街頭録音』関連	放送原稿	23点
	写真	26点
その他	スクラップなど	11点

点数は必ずしも多くはないが、戦時期や終戦直後の放送原稿が、ある程度まとまった形で収集できたことは、研究にとって大きな意義があると考えられる。

戦時下の録音放送の原稿

1937年に始まった日中戦争に合わせて登場した可搬型録音機によって、スタジオの外での音声の収録が広がると、アナウンサーも現地でインタビューや音声を収録したのち、ナレーションや背景音を加えて編集するなど、幅広く番組制作に携わるようになった。

平日午後6時50分から10分間放送された『青年手帖』もそうした番組の1つで、当時、九州各局は毎週月曜日に放送を担当した。写真2は、金子氏が長崎放送局に勤務していたときの『青年手帖』の放送原稿で、出征を控えた学徒を取材したものである。同梱のノートには「昭和18年8月放送」と記されている。以下は、その原稿の一部である。



写真2 『青年手帖』の放送原稿(1943年)

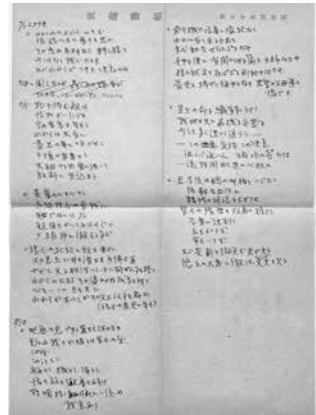


写真3 原稿作成にあたって作成されたメモ

校門は営門に通じてある。学生生徒の生活もそのまゝが 戦ふ国家の一分壁であります。

(略)

純忠ひとすぢ 脈々と流れる血潮は絶ゆる事なく 日本の光栄の歴史を創り 東亜に伸びる民族に、弥栄のさだめを与へたのであります。静かな学園にも戦ひの鐘は鳴り響いて居ります。只ペンをとりノートに向ひ己れの研究に没頭すれば 事足れりとしてゐた時代は過ぎ去つたのです。金ボタンの制服がカーキ色の軍服に、飛行服に、街に見うけた制帽が、鉾山に、工場に、闘ふ学徒の雄々しい姿が見られます。(略)

本日から、これら九州各地に於ける闘ふ学徒の姿を御伝へしてゆき度いと存じます。

こうした原稿に、現場で取材した音声を組み入れて番組を制作していたと推測される。

また、資料には原稿の下地と思われるメモもある。写真3は同封されていたメモである。放送番組表に使う用紙に、自作の銃後の心得などが、日付とともに整然と書き込まれている。

9/1 ひとくれの土にもひそむ 瑞穂の国の尊さを

(ママ)
 思ふ その恵めあますなく 耕し穫り のこりなく戦ふ力とす たゞわれらが三千と決意のみ
 9/15 英霊の心を心とし 前線特兵の勇戦に恥ぢない為 銃後をかへりみはせじの 大精動に徹する事だ

原稿作成の過程が書かれたメモが残されていることは少ない。資料からは戦時下、学徒までが兵役に就かざるを得ない中、放送でどのような表現を用いて、士気の向上を図ろうとしていたか、その一端をうかがうことができる。

おわりに

戦時下の放送原稿やそれに付随した資料は、終戦時に廃棄されるなどして、現存するものはきわめて少ない。金子氏の資料は、それに加えて、戦時下の地域放送局の番組制作の様子がわかるという点でも貴重なものと言える。

今回紹介したような戦意高揚のための番組は戦後、姿を消したものの、現場で音声を取録し、構成する「録音構成」と呼ばれる手法は、その後も引き継がれた。今回は、戦後にも継承された制作手法に焦点を当てて資料を見ていくことにしたい。(しまだ しょうこ)